

来日同行記・日本人よ、自信を持って！

理事・初代青年部長 早川 友久



ホテルオークラ東京内を散歩される李元総統 (9月6日)

二〇〇九年八月、李登輝元総統を私邸に表敬訪問した本会事務局は、翌月に控えた訪日講演のテーマが坂本龍馬の「船中八策」だと知らされる。李氏は「日本の若者に自信を持たせなくては」と熱を込めて語り、心から訪日を楽しみにされている様子だった。

東京で国会議員らを招いて晩餐会

九月四日午前九時十分(台湾時間)、李氏は曾文惠夫人を伴って台北桃園空港に到着。この日は、八八水害被災者の慰霊に訪台していたグライ・ラマ氏も午前七時に離台しており、現場にはテレビ局や新聞社多数が集結。李氏夫

妻をカメラが取り囲み、一般客も握手を求め拍手を送る中、午前十時発のJAL642便に搭乗。機内では同行する本会事務局や日台メディアの取材を受け、訪日の目的や抱負を語られた。

定刻より少し早めの日本時間十四時過ぎ、搭乗便は成田空港へ到着。夫人と手をつなぎ、通路を歩く李氏は心なしかほっとした様子。

二年前の奥の細道散策の際にも、東京の拠点となった港区虎ノ門のホテルオークラ東京に一行が到着したのは十五時過ぎ。出迎えの歓迎に集まった本会会員を含む五十人以上の歓声に笑顔で応えられていた。

投宿後、しばし休憩した李氏は、八時半からホテル内で自ら主催の晩餐会に臨み、ホストとして招待客を迎えられた。森喜朗・元首相や石原伸晃・自民党幹事長代理、民主党の長島昭久議員、中津川博郷議員、改革クラブの大江康弘議員、無所属の平沼赳夫議員、国際教養大学の中嶋嶺雄夫妻、評論家の金美齡氏、ジャーナリストの桜井よしこ氏、大宅映子氏、歴代の交流協会台北事務所代表など、百人以上のほる友人・知人が出席した。

会を二十時半過ぎに終え、李氏は居室で休まれたものの、翌日に向け何度も原稿を読み返されていたという。

満堂となった日比谷公会堂

翌五日、午前中をホテル内で過ごされた李氏は、十三時半すぎ、東京青年会議所主催「新日本創生フォーラム」会場となる日比谷公会堂に到着。入口では本会員らが日の丸を振りながら歓迎。李氏はわざわざ歓迎の列に歩み寄り、笑顔で握手を交わされた。

李氏は「竜馬の『船中八策』に基づいた私の若い皆さんに伝えたいこと」



日の丸の小旗を打ち振って大勢の人々が歓迎
(9月5日、日比谷公会堂)

と題した講演で、「船中八策」を一項目ずつ解釈しつつ、混迷する日本が進むべき道について示し、日台ともに「脱古改新」で時代に対応していかなければならないなどと力強く語り、二千人近い聴衆から万雷の拍手を受けた。

同青年会議所の榎野慶太理事長との対談もあつという間に時間が終了。会場は大きな拍手に包まれた。

十九時からは、ホテルオークラ東京で開かれた武士道協会主催のレセプションにご夫妻で出席。百名ほどの出席者と和やかな雰囲気の中で交流を楽しまれた。二十時半からは隣室の会場で訪日後初の公式記者会見に臨まれ、メディア約六十社が駆け付けた。

龍馬の足跡を訪ねて高知へ

来日三日目の六日朝、李氏はホテル内の庭園を散策。車寄せ付近では、タクシীর運転手に「東京のタクシীর景気はどうですか」などと気さくに質問。運転手も、突然現れた李氏に質問

されて驚いた様子。本会事務局や台湾から同行の李登輝学校卒業生らと談笑しながら、二十分ほど散歩された。

一行は十一時ごろ、本会員や東京青年会議所など約八十人のお見送りを受けて出発。たくさんの日の丸と「李登輝先生、万歳」、「台湾万歳」の合唱に、ご夫妻はにこやかに手を振りながら車上の人となり、羽田空港へ。

搭乗したJAL1489便は十五分ほど遅れて高知龍馬空港に着。まず桂浜近くの「高知県立坂本龍馬記念館」を参観。森健志郎館長と三浦主任学芸員の説明を受けて龍馬の足跡を辿った後、「拝啓龍馬殿」のコーナーでは、次のようなメッセージを残している。

「天下で指導者になりたい人が澤山居ります。併し指導者になれる人は多くありません。ましてや指導者として大きな功績を残す人は殆どありません。龍馬先生は近代化日本を指導した天から降りた人でせう。龍馬先生の精神的偉大さは記念館に来て見たり聞いたこ

とよって一層その偉大さに頭が下が
る一方です。龍馬をつちかった高知の
風土と人間、情熱にうたれました」

その後、桂浜の坂本龍馬像に到着。

早速、メディアに囲まれると「こんな
偉大な人物の下では、私たちは本当に
小さな存在だ」と、大きな龍馬像にな
ぞらえてその偉大さを称えた。会見の
途中ではアイスを口にしながら答える
場面も。この日の高知は三〇度。やや
秋風が吹き始めた東京と比べると、真
夏に戻ったかのような陽気だった。

見学を終えた李氏は、宿泊先となる
高知市内の城西館で「龍馬の『船中八
策』と私の政治態勢」と題して講演。

一九九七年、台湾初の民選総統として
船出した李氏に対し、PHIP社長の江
口克彦氏が書き送った書簡の中で龍馬
の「船中八策」に触れていたことを紹
介し、李氏が主導した台湾民主化の陰
に「船中八策」の存在があることを披
露した。講演にはおよそ百人が詰めか
け、地元出身の中谷元・元防衛庁長官



高知で講演される李元総統
(9月6日、高知・城西館)

からも熱心に耳を傾けていた。

その後、十八時からは、市内の割烹
臨水で高知県日華親善協会などが主催
する晚餐会に出席。初めての訪問とな
る高知県での第一夜を楽しまれた。

一夜明けた七日、李氏は午前中を休
息に充て、宿泊先で過ごされた。十三
時二十分過ぎ、「高知市立竜馬の生ま
れたまち記念館」を訪問。

その後、李氏一行は次の訪問地であ
る熊本へ向かうため、十五時三十分発
のJAL3586便に搭乗。背の高い
李氏にとって五十人乗りの小さな機材
はちよっと窮屈そう。約四十分で福岡

空港に到着。

空港貴賓室でしばし休憩の後、車で
熊本県へ。空港出口では、本会員な
ど百五十人が日の丸の旗を振って出迎
えた。その後、投宿先のホテル日航熊
本には十八時過ぎに到着。

平井数馬の墓参へ

八日午前十時、李氏は熊本市内にあ
る平井数馬の墓を訪れ献花された。平
井は、日本が領台して間もない一八九
五年七月、初めて開いた学校「芝山巖
学堂」に赴任。翌年元日、暴徒に襲わ
れて殉職した「六士先生」のうちの一人。
殉職時、弱冠十九歳だった。

墓所前では、福岡から十一人の遺族
も駆けつけた。平井の兄のひ孫、平井
真理子さんは「台湾の総統にお参りし
ていただくなんて夢みたいだ。とても
感激している」などと語った。

続いて十一時四十五分、李氏一行は
熊本城に到着。正門にあたる頬当御門
で車を降り、天丸御殿などを参観。一



平井数馬の眠る墓所を参拝（9月8日、熊本市内）

時間ほどの参観を終えると、熊本城をバックに記者会見。熊本城の印象を問われると「加藤清正はすごいお城を作ったものだ。誰かお城建築の研究をしている人がいかなあ」と感嘆。

この日も気温は三〇度を超え、午後は休息。十八時からはホテル日航熊本で開催された本会熊本県支部と日本会議熊本が共催する「李登輝元総統ご夫妻を囲む会」に臨み、三百人の出席者に万雷の拍手で迎えられて入場、李氏

と京都大学で同級生の沢田一精・元熊本県知事や、山内新・元副知事らが祝辞を述べた後、「台湾と日本・百年來の歴史及び今後の関係」と題して講演された（4頁参照）。

この講演では「日本と台湾は地理的な近さだけでなく、精神的にも非常に近い」と強調。今後、複雑化する国際社会や膨張する中国に対抗していくためには、日台が心と心の絆を深めていくことが大切などと話した。訪日五日目の疲れも見せず、三十分立ちっぱなしでの講演だった。

「訪日最後の夜を前に記者会見」

六日目の九日は午前十時二十分に出発、益城カントリークラブで「SAP IO」誌の企画により小林よしのり氏と対談。小林氏はこの対談を「新台湾論」と題して同誌に掲載している。

午後は阿蘇山などを訪問される予定だったが、疲労で持病の腰痛が悪化したため大事をとってキャンセル。そこ

で十七時から、ホテル内で日台の報道陣およそ二十社を前に記者会見。民主党政権の対中国関係についてなど、十分近くにわたって質問を受けた。

孫娘の坤儀さんに出迎えられ帰台

最終日の十日は九時半に出発、十一時過ぎ福岡空港に着。空港では、本会員ら約五十名が日の丸を振ってお見送り。車から降りたご夫妻は見送りの列に近づき、握手で別れを惜しんだ。

予定より少し早い十三時二十八分（台湾時間）に到着した台北桃園国際空港では、最愛の孫娘の李坤儀さん、次女の李安妮さん、黄昆輝・台湾團結聯盟主席、郭生玉・群策会秘書長や群策会のスタッフらが出迎え、七日間にわたる訪日の労をねぎらわれた。

李氏は持病の腰痛が悪化するなどしたが、台湾へ無事に戻ってホッとした様子。全行程に同行した本会事務局員にも「ご苦労さんだったね」と笑顔で声を掛けられた。